

四国大学紀要, (A) 41 : 19–26, 2013
 Bull. Shikoku Univ. (A) 41 : 19–26, 2013

1700年代に至るまでのアイルランド貿易に関する幾つかの側面

蔵谷 哲也

Some Aspects of Irish Trade up to the 1700's

Tetsuya KURATANI

ABSTRACT

Judging from the available literature, historically Irish trade has been under the influence of England. Especially the chief export, cattle from Ireland into England, had been opposed and restricted, and practically stopped by English stockbreeders. It is undeniable that the pattern of Irish trade was shaped by the Britain in the interest of the latter.

KEYWORDS : Cattle Acts, the Restoration, Poynings' Laws

1. はじめに

本稿の目的はアイルランド貿易がアイルランド国内事情と英国のアイルランドに対する法制上の干渉によって左右されてきたことを多少示すことを試みることである。アイルランド人口が高度に組織化され、人口に富み、製造業が確立していたら、アイルランドに対する英国の干渉は異なったものであったはずだ。アイルランド貿易に対する英国の干渉は重商主義の当然の帰結であるかもしれない。英国の金銀地銀の流出の原因の一つはアイルランドからの輸入の支払いであると見なす考えがあった。歴史上、法制上の理由で英国にとってアイルランドは独立した国家として扱われない時期があったから、英国が様々な干渉をすることは当然のことと考えられたのであろう。アイルランドは北米における英領植民地とは事情が著しく異なるが、実質的には英国の植民地扱いをされていたことは歴史上否定できないであろう。

2. アイルランドと英国の複雑な関係

ラトランド侯爵の、グレンヴィル (C.T. Grenville) の1784年12月3日の警句によると、アイルランドは英国にとって、あまりにも偉大なので、関連なしとすることはできないし、あまりにも近い国だ

から、外国の国家として依存することができないし、あまりにも小さ過ぎて独立することができないという。これは12世紀から20世紀までのグレート・ブリテンのアイルランドに対する態度を要約する陳述であるといわれる。¹ 一方、アイルランドと対照的なのはアメリカである。アメリカは国内に膨大な資源を持っているので、制約的な法令をどれほど作っても完全には対抗できなかったであろう。そして、アメリカは母本国からあまりにも離れているので、英国はアメリカの貿易に多くの害を与えることができなかった。そして実際のところ、イングランドによって、アメリカは著しく苦しめられたかどうかは疑わしいことである。

3. アイルランド貿易の概略²

ローマの歴史家タキトゥス (Cornelius Tacitus) によると、1世紀末、アイルランドの諸港はブリテンの諸港よりも、国際通商においてよりよく知られていたという。³ そしてさらにアイルランドの文献、例えば、権利の書 (the Book of Rights) には外国から輸入された奢侈財、ドレス、金銀の装飾物、刀類、盾、奴隷に関して述べられている。ノルマン朝以前の時代において、海外貿易がどれくらいあったかを示す多くの考古学的証拠を提供するのはダブリンやウォーターフォードのようなバイキングの町

である。これらの町の小さな作業場から、アイルランドは指輪 (ring pins) や金属細工物、骨、鹿の櫛や宝石類を欧州全体に輸出した。輸入貿易はアイルランドの都市産業の他の原材料と合わせて、ワイン、鉄、塩、琥珀が中心だった。⁴ 12世紀においては、ジラルダス・カンブレシス (Giraldus Cambrensis) によると、アイルランドは自国の生産物である皮をフランス、特にポアトゥーのワインと国際交換をしていたという。13世紀、アイルランドの毛織物はイングランドに輸出されていた。1300年では、エドワード1世の軍隊はスコットランドに在る間、アイルランドで購入された小麦、オートムギ、オートミール、エンドウ豆、豆、ワイン、ビール、塩、豚の供給をカークブリー (Kircudbright) とエア (Ayr) で受けた。オートムギはエアからダブリンに送られ、製粉されてから、軍隊が使用するために送り返された。1376年、アイルランドの製造業でフリーズが登場したことが記録されていた。14世紀においては、フリーズ (frieze) がイングランドに輸出されていた。⁵ 1410年、ケンブリッジの通りを舗装する上で、通行料金が課せられたが、他の課税の対象となったものの中で、アイルランドの布があった。100インチにつき、2ペンス課税された。このことは当時のイングランドにおいて、アイルランド製の布は全く一般的な商品であったにちがいないことを示している。⁶

12世紀以前のアイルランド貿易に関する歴史的証拠は非常に限られている。狩猟犬、奴隷、そしておそらく毛織物が重要な輸出品目であったという。この毛織物は中世後期に衰退するまでは唯一の最重要輸出品目であった。皮は中世後期になって、布や毛織物よりも重要な輸出品目になった。14世紀においては、毛織物とウールスキン(毛がついたままの羊皮)の輸出量は減少したが、その輸出は継続した。16世紀におけるアイルランドの外国貿易の構造は中世後半の貿易のパターンと比べてほとんど変化していない。

1611年のアイルランド貿易に関する報告によると、主要輸出品はフリーズ (frieze)、穀物、獣脂、樽板 (pipe-stave)、獣皮であり、輸出の大部分はス

ペインに向けられた。ワイン、鉄、塩が主要輸入物であった。16世紀の大部分のアイルランド貿易は、アイルランドの南部や東部の港からブリistolまたはチェスターのイギリスの港まで。イギリス船舶を使って行われた。フランスやスペインの港も外交が許すかぎりにおいて使われた。スペインやフランスの商人はアイルランドの北部や西部の個々のアイルランド族長と取引をした。

17世紀初期に王権の拡大は地方のアイルランド貴族の貿易権を侵害した。そして、このことは、植民地化を通じての人口拡大と合わせて、自然資源が集中的に開発されるにつれて、外国貿易は劇的に増大したことを意味した。最大の革新は、1600年まで全く輸出されなかったのであるが、1640年までに年1万5千頭の生きている家畜が輸出されたことである。これは150万から200万頭の羊の輸出と合わせると、アイルランド貿易の半分以上の額を占めた。チェスターに陸揚げされた綿の量は1580年代の年約100~200ストーン(14ポンドに相当)から、1639年には6,666ストーンに拡大した。魚類と木材の貿易は拡大が限られた。全体的には、ほとんど加工されない原材料が輸出財の主体であった。

1650年代のアイルランド経済構造の変化は家畜法 (Cattle Act) によって強化された。これは生きた家畜や羊の輸出に依存することから、樽詰の牛肉やバター、チーズのような加工品の輸出に向かう動きを奨励した。こうした製品は1720年代までアイルランド貿易の50%以上を占めた。毛織物とウールの服の輸出は毛織物法 (Woollen Act) によって制約されるまで著しく増加した。

アイルランド輸出全体は17世紀後半では金額でおよそ50%増加した。17世紀初頭では、イングランドは家畜輸出の主要市場であった。そしてそれ以来、概して言えば、アイルランド貿易の主要市場となった。加工品貿易は北アメリカに向けられた。⁷

1664年、全てのアイルランド輸出の約74%はイングランドに向けられたが、1683年までに30%まで下落し、1700年までに42%に増えた。

1720年代中頃までに、リンネルはアイルランド全貿易額の約3分の1を占めるようになった。景気後

退からアイルランドが回復したので、家畜生産と国内リネン製造が貿易経済の支えとして出現した。

18世紀後半のアイルランド海外貿易のパターンは食糧と麻布 (linen cloth) に対する需要によって支配されていた。1770年代にアイルランドの自由貿易を保証するような政治的進展があったにも関わらず、英国はアイルランドの最重要貿易相手国として存在した。英国の穀物需要の増大によって、18世紀後半において、アイルランドの穀物輸出額は2倍になったが、1790年代まで、アイルランドの外国貿易の最大品目は麻布であった。

合同条例に従って、アイルランドは貿易を目的とする別個の単体としての存在ではなくなったが、19世紀の数十年間に収集されたデータによると、農産物の輸出、すなわち家畜と作物輸出が大飢饉のときまで急速に増大したことが示されている。

チャールズ2世の統治までは、イングランドはアイルランド通商や製造業に制限を課していなかった。⁸ 王政復古以前は、アイルランドはイングランドと共通した優位と便益をすべて享受していたと、英国の庶民院 (British) でノース卿 (在位1770-82) は語った。⁹ アイルランドは英国の慣習法とマグナ・カルタの下にあった。この慣習法により、臣民は全ての種類の財産を享受することが保証され、マグナ・カルタによって、王国の全ての港の自由が確立された。¹⁰ つまりマグナ・カルタによってアイルランドの貿易は保証され、アイルランドの輸出は慣習法によって承認されていた。換言すると、アイルランドが名目的であれ、実質的であれ、含まれる条約は作られなかった。1495年に可決されたポインティングス法により、イングランドでそれまで効力のある法令はアイルランドまで拡張されるようになった。¹¹ アイルランド貿易はイングランドによって二重の干渉を受けていた。一つは直接的な干渉で、アイルランド貿易を制約する上で、イギリス議会が可決された制定法 (statutes) から生じたものである。間接的な干渉は、ポインティングス法として知られる制定法の条項に下で、アイルランド議会の立法に対するイギリス政府の影響から生じたものである。¹² アイルランドの君主 (the Crown) はイングランド

の君主に従属していることは承認されていることから、アイルランドの為にイギリス議会が法律を制定する正当な資格が生じた。イギリスの全ての植民地と保護領 (dependencies) に対する法律制定の権利をイギリス議会は行使した。アイルランドに対しても同じ権利を行使したと主張した。1782年に至るまで、この権利が主張され、時折行使された。¹³ すなわち、ヘンリー7世の統治下で、1495年にアイルランド総督代理ポインティングスの名前が付けられた法が制定された。イギリスの枢密院に法案の見出しが提出され、そしてイングランド国王の認可を受けるまで、アイルランド議会は法案を提示してはならないという制法である。アイルランドは、アイルランド自身の利益のためではなく、母本国の便宜のため、統治されるべき植民地と見なされていた。¹⁴

4. 王政復古とその通商政策

チャールズ2世の治世には、第一次英蘭戦争の影響の回復の兆しがみられた。大量の家畜輸出貿易が確立したのである。農業技術がほとんどない国にとって、家畜と羊の飼育はとりわけ適切な産業であった。土地の主要部分は在外地主によって所有されていたので、彼らは領地で大量の地元のアイルランド人を雇用することをためらっていた。アイルランドの土地は牧畜に適切であることが当然ながら記述されている。スペンサー (Spenser) によると、アイルランドは山や森林が多いが、多くの溪谷があり、居住に適している。そして連なる山々は牧畜を増やすであろう。なぜならアイルランドは家畜にとって大いなる土壌であり、家畜の増殖にとっても適しているからである。1620年、10万頭の家畜がアイルランドからイングランドに輸出され、1頭当たり、40から50シリングが支払われた。クロムウェルのアイルランド侵略の間はこの貿易は実質的に存在していなかったが、この貿易は急速に拡大した。アイルランドに土地を与えられたクロムウェルの多くの兵士達が大規模な羊や家畜の飼育家になったという事実がこの貿易拡大が主に起因する。¹⁵ 1663年になって、1641年より、雄牛、羊、バター、牛肉の輸出は

3分の1だけ増大した。¹⁶

そして、チャールズ2世の治世では、アイルランドは重商主義制度が特に好む経済活動に全く欠けていた。貨幣経済はほんのわずかしこ浸透しておらず、農夫は自給自足の為に農業を行い、大部分の支払いは物品で行われていた。製造業はほとんどなく、外国貿易もほとんどなかった。外国貿易の4分の3はイングランドとなされて、大部分の外国貿易全体はイングランド商人によって管理されていた。アイルランドの主要輸出財は家畜であり、肥育された家畜の輸出はほとんどなかった。輸入の最重要品目はタバコであった。砂糖や様々な織物、果物、穀物も輸入された。¹⁷

5. アイルランド家畜貿易に対する制約

アイルランドにとっては、ブリテン本島に対する年間肉牛輸出は1630年代後半までに年2万頭を越えたと推定される。作物の栽培や土地の開墾よりも、貿易のための家畜の放牧と飼育が強調される結果をもたらした。この結果、家畜とその副産物（牛肉、皮、獣脂、等）はアイルランド貿易の主要商品となった。イングランドとの貿易は十分大きかったので、イングランドとウェールズの利益団体は早くも1621年には、アイルランドの家畜から関税保護を求めるロビー活動をしていた。1621年5月19日、イングランドとウェールズへのアイルランドの家畜輸入に反対する法案が庶民院に導入された。家畜の放牧はウェールズ経済の重要部分であり、アイルランド家畜輸入に対する反対は、アイルランド牧畜は、本土の競争相手が支払う牧草地の地代よりも、より低い地代から不正な利益を受けているという信念から生じている。しかし採択されなかった。¹⁸

アイルランド君主は家畜貿易から利益を得た。家畜とその副産物に対する輸出関税を得た。そして畜産業に特化した結果、その他のものをほとんど生産しなかったのも、アイルランドはほとんどの奢侈財や消費財を輸入しなければならなかった。その結果、君主は輸入手数料を徴収することができた。¹⁹

アイルランドの家畜貿易は英国との関係において

重要な意味合いを持つ。17世紀の水準で見ても、アイルランドの家畜は痩せ細っていて、その肉は固く、バター品質は良くなく、皮は痩せて薄い。²⁰ そうであってもアイルランドの主要輸出財であり、アイルランドの収入源であった。イングランドに運び込まれて、東南部の牧草地で肥育されてから、食肉として販売された。それゆえ、イングランドの肉屋は、かかる家畜によって、生活手段を得ていた。しかしながら、英国の北部と西部、ならびにウェールズの牧畜業者にとっては、アイルランド産の家畜は安すぎる値段で売る競争相手とみなされた。外国産の家畜の輸入に拠って英国の牧畜業が敗退すれば、地代収入が減少するという懸念から、イングランドのいたるところの土地所有者はアイルランド産の家畜貿易に制約を課し、それから禁止することを強く求めた。その後、イングランドの地代は上昇することはなかったし、英国の製造業者達はアイルランド市場での売り上げが減少したという不満の声が上がったにも関わらず、土地所有者達は彼らの大義名分を主張した。

17世紀、アイルランドによるイングランドへの肥育牛の輸出は伸びた。イングランドの牧畜業者が抗議し、その貿易は禁止された。1663年の家畜法のようなロンドンを起源とする重商主義的な法令は、プロテスタントの独立を求める愛国主義をますます刺激したと考えられた。²¹

アイルランドの牧畜業者は、その代わりに痩せた家畜をイングランドの牧畜業者が太らせるために輸出した。後者が抗議し、その貿易は禁止された。そこで、アイルランドは食肉処理されたものを輸出した。イングランドの食肉処理業者が抗議し、この貿易は禁じられた。最終的には樽に詰められた塩漬けの牛肉と豚肉がアイルランドの牧畜業者の輸出品になった。この貿易は英海軍と商船隊にとって有益なので、抗議されることなく輸出できた。このようにして、これはアイルランドの主要産業の一つとなった。²² このアイルランドの家畜の輸入を禁止する措置は、競争がイングランドの北部と西部やウェールズの郷紳を破滅させることがないように、恐れに拠って引き起こされた。²³

イングランドと比較すれば、アイルランドは牧畜国であった。ジェームズ・バトラー（第1代オーモンド公）は1661～1669年までアイルランド総督（the Lord-Lieutenant）であったが、保護法と外国人労働者を移入させることによって、製造業を構築しようと試みた。その中で毛織物品の製造を奨励した。結局のところ成功しなかった。チャールズ2世の治世における英国議会は、オーモンド公の抗議にも関わらず、当時存在していたアイルランドの輸出事業、すなわち家畜貿易に一撃を与えた。²⁴ 1663年、イングランドとウェールズの牧畜業者と土地所有者は、彼らの事業の状態に不満を持ち、生産条件が有利で、生活水準の低いスコットランドとアイルランドからの競争を恐れていた。この生きた家畜をイングランドに輸入することを禁ずる法が通過した。禁止される期間は毎年、7月1日から12月20日の間である。この期間中、牧草を与えられた家畜はよい状態であった。²⁵

スコットランドからの家畜貿易は制限されていたが、アイルランドほどではなかった。しかし、イングランド・オランダ戦争の間、アイルランドは敵国と交易することはゆるされていた。そして、これは家畜法の影響を軽減させたように見える。英国の牧畜業者、特に北部の業者はまだ満足することなく、さらに保護を求め続けた。そして1666年、彼らはアイルランドの家畜輸入の完全な禁止を獲得した。それから14年間、この禁止はマトン、子羊の肉、バター、チーズに拡張された。スコットランドもアイルランドの家畜輸入を禁止した。そして、アイルランド議会はスコットランドに報復することが許されていたのだが、この法はイングランドとスコットランドが合同するまで、効力を持ったままだった。²⁶

17世紀初頭、羊毛は主要輸出品であった。しかし戦乱の間に、農民たちが羊の群れを絶滅させた。なぜなら商業用の牧草地は農民達の生存目的の為のその土地の使用という主張と競合したからである。イングランド議会もアイルランドの農産物輸出の伸びを1667年、肥育するためにアイルランド肉牛をイングランドに輸入することを禁じることによって、制限した。安価なアイルランドの家畜はイングランド

の牧畜業者と競合した。そこでアイルランドの土地所有者は代替の市場を探索しなければならなかった。そして、食料品貿易にその市場を見出した。塩漬けと樽詰の肉を欧米の通商に従事する船舶に供給することである。この食料品貿易の副産物として、アイルランドはなめし皮、獣脂、ベーコン、そしてバターの主要輸出国になった。18世紀と19世紀において、いくらかの牧畜業者はささやかな通商上の成功を収めた。²⁷

アイルランド経済はイングランド市場に供給するためいくつかの領域に集中していた。家畜と穀物はイングランド市場に輸出された主要財であった。しかし輸出の水準は関税法によって制約されていた。1666年の家畜法はイングランド市場からアイルランドの家畜を排除した。1758年に撤廃されたが、18年後に再導入された。この法はアイルランドが羊毛や穀物財を発展させるように強制した。しかし、保護貿易主義的手段を組織的に用いて、アイルランドの毛織物製品と染色されたリンネル（1699年）、ガラス（1746年）を英国市場から排除した。こうして、在来のアイルランド産業が破壊され、英国はこれらの製造領域における産業上の優位を保持した。²⁸

6. 貿易自由化の一つのきっかけ

アダム・スミスの『諸国民の富』が1776年に出現するまでは、18世紀末まで、自由貿易の思想はほとんど流行しなかった。貿易量はほぼ一定であるから、1国の貿易の増大は他国の貿易の減少を必然的に導くという考えは、金塊が重要視され、それゆえ、貿易黒字は金塊の流入を維持するとした。政府は保護された国内市場を創ることを求め、製造品貿易における黒字を奨励した。この目的の為に、イングランドでは、アイルランド、そして諸植民地の為の法律が制定された。織機の輸出禁止と熟練職人の移出を禁じたように、原毛や羊のような原材料の輸出は禁じられた。製造品の輸入は禁止されるか制限された。絹や捺染キャラコ（printed calicoes）は1700年にそうされた。アイルランドと植民地経済はイングランド経済の競争相手ではなく、助け手となるよう

に規制された。植民地の再輸出と植民地市場がイングランドにとって重要性を増してきたので、この傾向は奨励された。1785年、ピットはアダム・スミスの思想に影響され、イングランドとアイルランド間の自由貿易を導入することを求めた。しかし、保護貿易主義から突然、自由貿易主義に転換するにはあまりにも英国の反対が強すぎた。²⁹

7. むすびに代えて

アイルランドは英国と比較して劣ることがない自然資源を、ある時期享受していた。エドモンド・バーク (Edmund Burke) はイングランドと同じ気候にあり、同じ特性と生産物をもつ国であると、1778年に述べている。³⁰ 石炭と蒸気機関の時代が来る前は、アイルランドの無限の水力は、製造競争における自然の優位を与え、公正な扱いを受けていれば、無数の熟練労働移民を引きつけていたであろうと結論づけている。³¹ アイルランドと英国は別個の議会を持つ時期があったが、英国のアイルランドに対する影響力が実質的に優勢的であったことは否定できない。

理論的には比較優位に沿った貿易を推進していくことが貿易参加国全て（または世界全体）の繁栄に貢献するのであるが、重商主義的思想が自由貿易思想によって置換される時代には、当時はまだ程遠かった。

註

- 1 H.M.C. 14 report app. 1, p. 155.
- 2 本稿では、アイルランド貿易の概略に関しては大部分、Connolly の文献に依存している。
- 3 Pinkerton, p. 177.
- 4 Connolly, p. 421.
- 5 アイルランドで作られるか、またはアイルランドの羊毛を使ってイングランドで作られたフリースには税金または関税 (aulnage duty: 45インチを1単位とする布の長さを尺度とした関税) Pinkerton, p. 181.
- 6 Pinkerton, p. 182
- 7 Connolly, pp. 421-2.
- 8 1660年、オランダに亡命していたチャールズ2世が即位し、イングランドで王政復古があった。

- 9 Macneill. p. 18.
- 10 Hutchinson. P. 164.
- 11 Macneill. p. 19.
- 12 アイルランド内のイギリス領植民地統治に関する法律。1494 - 95年成立。
- 13 Proceedings, p. 8.
- 14 Froude. p. 178.
- 15 チャールズ2世によって、クロムウェルの兵士達に与えられた土地の多くは元の持ち主に返還された。
- 16 Petty, p. 312.
- 17 Clark, pp. 287-8.
- 18 Nicholls, pp. 161-2.
- 19 Nicholls p. 162.
- 20 Saul, p. 27. パターの品質に関しては、いたるところで悪評を買い、市場では最安値を付けられた。
- 21 Robbins, p. 4. イングランドでは家畜法に対して反対する立場もあった。つまり、あまり肥沃ではないか、またはあまり安価ではない地域から輸入される家畜を肥育させることに関心がはられていたからである。
- 22 Thomas E. Hachey; Joseph M. Hernon Jr. et al. p. 33.
- 23 Weston and Greenberg, p. 176.
- 24 Clark, p. 288.
- 25 Clark, p. 288.
- 26 Clark, p. 288.
- 27 Seavoy, p. 309. Curtis, p. 225.
- 28 Chew, p. 43.
- 29 Black, pp. 91-2.
- 30 Burke (1881), p. 101. Hutchinson も同様なことを述べている。Hutchinson (1779), p. 156.
- 31 Froude, p. 178.

参考文献

- Black, Jeremy. *A System of Ambition? British Foreign Policy 1660-1793*. New York: Longman. 1991.
- Burke, Edmund. *Letters, Speeches and Tracts on Irish Affairs by Edmund Burke*. edited by Arnold, M. London: Macmillan and Co. 1881.
- Chew, Sing C. *Logs for Capital: The Timber Industry and Capitalist Enterprise in the Nineteenth Century*. Westport, CT.: Greenwood Press. 1992.
- Clark, G. N. *The Later Stuarts, 1660-1714*. Oxford, England: Clarendon Press. 1934.
- Columbia University Press. "Grattan, Henry," *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. Columbia University Press. 2013.
- Connolly, S. J. *The Oxford Companion to Irish History*. Oxford: Oxford University Press. 1999.

- Cronin, Mike. *A History of Ireland*. Basingstoke, England : Palgrave. 2001. p. 75.
- Coupland, R. *The American Revolution and the British Empire : The Sir George Watson Lectures for 1928, Delivered before the University of London in the Winter of 1928-9*. London : Longmans, Green and Co. 1930.
- Cronin, Mike. *A History of Ireland*. Basingstoke, England : Palgrave. 2001.
- Curtis, Edmund. *A History of Ireland : From Earliest Times to 1922*. London : Routledge. 2002. p. 225.
- Edie, Carolyn A. *The Irish Cattle Bills : A Study in Restoration Politics*. *Transactions of the American Philosophical Society*. New Series, Vol. 60, No. 2 (1970), Philadelphia : American Philosophical Society.
- Evans, Eric J. *William Pitt the Younger*. London : Routledge. 1999. Page. 62.
- Froude, James Anthony. *The English in Ireland in the eighteenth century. Vol.I*. London : Longmans, Green, and Co. 1881.
- Hachey, Thomas E., Hernon Jr. Joseph M. and McCaffrey, Lawrence J. *The Irish Experience : A Concise History*. Armonk, New York : M. E. Sharpe. 1996.
- Hague, William. *William Pitt the Younger*. London : HarperCollinsPublishers. 2004.
- Irish Home Rule League, *Proceedings of the Home Rule Conference held at the Rotunda, Dublin, of the 18th, 19th, 20th, and 21st November, 1873*. Dublin : The Irish Home Rule League. 1874.
- Hutchinson, John Hely, *The Commercial Restraints of Ireland considered in a series of letters to a noble lord. Containing an historical account of the affairs of that kingdom, so far as they relate to this subject ...* Dublin : W. Hallhead. 1779.
- Jackson, T. A. *Ireland Her Own : An Outline History of the Irish Struggle for National Freedom and Independence*. edited by Greaves, C. Desmond. London : Lawrence & Wishart. 1991. p. 5.
- Joyce, P.W. *A social history of ancient Ireland ; treating of the government, military system, and law ; religion, learning, and art ; trades, industries, and commerce ; manners, customs, and domestic life, of the ancient Irish people vol.II*. London : Longmans, Green, and Co. 1903.
- Kearney Hugh F. *Ireland : Contested Ideas of Nationalism and History*. New York : New York University Press. 2007. p. 213.
- Maccoby, S. *English Radicalism 1762-1785*. London : George Allen and Unwin Ltd. 1955.
- Macneill, J.G. Swift. *English Interference with Irish Industries*. London : Cassell & Company, Limited. 1886.
- Morley, Vincent. *Irish Opinion and the American Revolution, 1760-1783*. Cambridge, England : Cambridge University Press. 2002.
- Murray, Alice Effie. *A History of the Commercial and Financial Relations between England and Ireland from the period of restoration*. London : P.S. King & Son. 1907.
- Nicholls, Andrew D. *The Jacobean Union : A Reconsideration of British Civil Policies under the Early Stuarts*. Westport, CT. : Greenwood Press. 1999.
- O'Donovan, John. *Leabhar Na G-ceart, Or, The Book of Rights*. (translated and edited by O'Donovan). Dublin : Printed for the Celtic Society. 1847.
- Petty, William Sir. *Tracts chiefly relating to Ireland. Containing : I. A treatise of taxes and contributions. II. Essays in political arithmetic. III. The political anatomy of Ireland. To which is prefixed his last will*. Dublin : Boulter Grierson. 1769.
- Pinkerton, William. "Contributions Towards a History of Irish Commerce," *Ulster Journal of Archaeology*. First Series, Vol. 3, Belfast : Ulster Archaeological Society. 1855.
- Robbins, Caroline. *The Diary of John Milward, Esq., Member of Parliament for Derbyshire, September, 1666 to May, 1668*. Cambridge, England : Cambridge University Press. 1938.
- Saul, S. B. *Studies in British Overseas Trade, 1870-1914*. Liverpool : Liverpool University Press. 1960.
- Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. edited by Bullock, C. J. New York : P. F. Collier & Son. 1909.
- Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland as it was in the Reign of Queen Elizabeth : Written by Way of Dialogue between Udoxus and Ireneus*. Dublin : Printed for Laurence Flin and Ann Watts. 1763.
- Seavoy, Ronald E. *Famine in Peasant Societies* New York : Greenwood Press. 1986.
- Stanhope, Earl. *The Right honourable William Pitt*. Vol. I. London : John Murray, Albemarle Street. 1867.
- Watson, J. Steven. *The Reign of George III, 1760-1815*. Oxford : Clarendon Press. 1960.
- Weston, Corinne Comstock. and Greenberg, Janelle Renfrow. *Subjects and Sovereigns : The Grand Controversy over Legal Sovereignty in Stuart England*. Cambridge, England : Cambridge University Press. 1981.

抄 録

入手可能な文献によると、歴史的にアイルランド貿易は英国の影響下にあった。特にアイルランドの主要輸出財である英国向けの家畜は英国の牧畜業者の働きによって輸入制限、輸入禁止を課せられた。アイルランド貿易のパターンは英国の利益の為に形成されてきたことは否定できない。

キーワード：家畜法，王政復古，ポイニングズ法